

保育者養成校における表現指導の取り組み ー授業の実践と学生の記録の分析から表現の深まりを目指してー

藤井 美津子

抄録:

保育内容「表現」では、子どもたちの多様な表現を受け止め育てるために必要な、学生自身の表現力を深めていくことを願い、授業改善に取り組んでいる。本研究は、身体を媒体とした「身体表現」、音や声は「音楽表現」、言葉は「言語表現」、ものや絵による表現は「造形表現」など、これらの表現の源は密度につながって結びついていることを理解し、それらを総合的に取り入れた授業実践を通して、学生の振り返りの記述から、その成果を検討し、今後の授業改善への手がかりを得ることを目的とした実践報告である。

授業の中で学生自身が総合的に表現を学び体験することで、遊びや生活の中に子どものさまざまな表現が表れていることを明らかにしてきた。また、遊びや生活の中に芽生えている子どもの表現を出発点として、表現する力を育むために、どのように子どもの活動を援助すればよいのかを、様々な授業形態を通して取り組んできた。授業の回数を追うごとに、学生たちの表情が柔らかくなり、入学当初の気負いや苦手意識が克服されて、幅広く表現力を身につけようと前向きに取り組む姿があった。学生たちの「表現力」と「実践力」の向上につながったと考える。

キーワード: 保育内容「表現」、豊かな感性と表現、表現力、実践力、深まり

1. 【はじめに】

平成30年4月に施行された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には共通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が挙げられた。10の姿を共通言語として、接続期である幼児教育と小学校低学年の教育を「スタートカリキュラム」を通じて各教科の学びにつなげ、子どもの姿を中心とした連携が求められている。

領域の「表現」においては大きな変更はないが、10項目の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中にも「豊かな感性と表現」として、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だち同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」と示している。

一方、養成校においては、在学中に、より実践力を高めておくことを求められている。「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」(文部科学省)の中では「これからの時代の幼稚園教諭に求められる資質能力」として3つの資質能力をあげている。(1) 幼稚園教諭として不易とされる資質能力、(2) 新たな課題に対応できる力、(3) 組織的・協同的に諸問題を解決する力である。

領域「表現」における実践力とは何かを考えた時、絵の指導ができる、ピアノが弾ける、楽譜が読めるなどの技術的な力はもちろんだが、保育者自身の豊かな「表現力」そのものが、まさにこれらの3つの資質能力であり、多様な保育の場で対応できる実践力になると考える。また、子どもたちの感性、表現力を育てるのに、保育者が豊かな表現力を持っているべきなのは明らかである。保育者養成校の「保育内容(表現)」の授業では、これらのことを踏まえて、子どもの感性と表現を豊かに育む保育環境について、学生が考え、実践できるようになるための授業展開が必要であると考え。

2. 【目的】

平成 29 年 3 月の幼稚園教育要領を含む学習指導要領の改訂では、幼児教育から高等学校教育までの一貫した理念の下で教育内容の改善がなされた。それに伴い幼稚園教諭・保育教諭養成を行う大学等においては、より質の高い幼稚園教諭・保育教諭を養成することが求められている。筆者が務める短期大学では、2 年間という短期間で学生たちの資質能力向上に努めなければならない。

平成 30 年 4 月施行の幼稚園教育要領の領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。領域表現では身体を媒体とした場合「身体表現」、音や声は「音楽表現」、言葉は「言語表現」、ものや絵による表現は「造形表現」となる。これらの表現の源は密度につながって結びついている。

2 年間で、それぞれの分野において、高度な技能能力を求めることには限界がある。そう考えた時に、学生たちに知識や技能取得に加えて、保育の場で実践力となる力を向上させることが重要だと考える。それは、文部科学省が示す「幼稚園教諭に求められる資質能力」にある「実践していく力」「工夫する力」「新たな課題に対応できる力」ではないだろうか。

領域「表現」の面から保育者に求められる「表現力」を考えると、まさにこの「工夫する力」「新たな課題に対応できる力」などを持ち合わせている人は、豊かな「表現力」が備わっている人だと感じている。

子どもたちの豊かな表現を育む人は、子どもが傍にいる大人(保育者)に「きれいだね」と伝えたいような人である。保育者はまず、心豊かな「受け手」として傍にいないといけない。また、安心して表せる「受け手」であるだけでなく、表現の「読み手」「表し手」としての感性も、みがかなければならない。

学生たちにまず学んでほしいのは、表現の技法のみではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有できる心と身体である。しかし、学生のなかには、表現することに抵抗があったり、造形表現に対して苦手意識を持つ状況がある。そのためには、表現に対するためらいや構えを克服することが第一歩である。自分の気持ちを率直に無理なく表現しつつ他者の表現も受け入れるという態度は保育者の専門性の一つである。

子どもたちの表現の誕生に立ち会い、育む人になるために、まず心を開き、表現を楽しむ人になってほしいと、事例や実践、協働作業や話し合いから授業を進めていった。

本研究は授業を通して学生たちの「表現力」と「実践力」の向上につながる授業の視点を検討し、1 年生から 2 年生への表現・造形表現活動に対する変容や、指導法に関する実践的研究をまとめ、今後の授業内容の改善に役立てることを目的とする。

2 年間という短い養成機関で、表現力を向上させるために必要なこと、できることは何かを探りたい。

3. 【方法】

上記の目的を踏まえ、保育内容(表現)では、1 年生 35 名を対象に 4 月～8 月、15 回ににおける授業を中心に、そこから 2 年生で取り組む造形表現の授業にどのように繋がり変容していくのかを、以下の 4 つの観点にそって学生の記録や振り返りから考察していく。

- ① 授業内容に応じて 4～5 人でグループをつくり、話し合ったり、作品を見せ合ったり、一緒に考え合うことで、自信をもって自己表現し、お互いを刺激し合うことで人間関係を深め、社会性をも学ぶ機会とする。
- ② 実践授業について不安なく取り組めるように、授業の目的や授業内容をシラバス以外にも事前に細かく伝え、材料の準備など主体的に取り組むことで、授業内容が連続性のあるものや季節感を感じられるものにする。

- ③ 自分が表現するだけではなく、実習等に活かせるように園児に対してどのような指導を行えばよいのかを、授業全体を通して学生自身に考えさせたり、振り返りの記録等を通してグループで話し合う機会をもつ。
- ④ 制作した作品の結果ばかりを評価するのではなく、学生自身が制作する過程において心を開いて自由にのびのび表現できる環境を大切に、学生の感性をみがき、実践力につなげるようにする。

表 保育内容（表現）シラバス

回	授業内容・テーマ・キーワード	実践事例
1	保育における領域「表現」とは何か 保育の基本と子どもの表現	(1)
2	保育における「表現」のねらいや内容の理解 保・幼の思い出を話し合う	(1)
3	季節の楽しい表現遊びのねらいと内容・実践演習（だんご虫の世界）	(2)
4	子どもの表現の発達 表現の芽生えと分化 を読み解く	
5	子どもの表現の発達 造形的・身体的表現の芽生えと発達を読み解く	
6	行事と表現活動 （実践演習 季節の壁面構成を考える）	(3)
7	行事と表現活動 （実践演習 季節の壁面構成を完成させる）	(3)
8	子どもの表現が生まれる源泉 体験し心が動くチャイルドウォッチング	(4)
9	子どもの表現が生まれる源泉 体験し心が動く 身体表現を創作	(5)
10	子どもの表現が生まれる源泉 コミュニケーションとしての表現	(6)
11	季節の楽しい表現遊びのねらいと内容(実践演習 海の生き物たち)	(7)
12	季節の楽しい表現遊びのねらいと内容(実践演習 共同作品の完成)	(7)
13	行事と表現活動 （実践演習 音楽的表現オペレッタに取り組む）	(8)
14	部分指導案を作成し、グループで模擬保育を行う	
15	学習のまとめと省察 小テスト	

4. 【授業実施の概要及び考察】

(1) 実践事例 保育所・幼稚園の思い出を話し合う

どんな先生になりたい？

授業の概要

4月、入学してきた学生たちは、まだ緊張の中にいる。初めての90分授業に戸惑い、やや疲労気味で笑顔も少ない。そこで気の合う仲間グループを作り、保育所・幼稚園時代の心に残っている出来事を思い出し、それを記録し、どんな先生を目指しているのか等、気楽な雰囲気の中で話し合ってもらった。どんなことが印象に残っているのか、なぜ印象に残っているのか等言葉にすることで、目指す教師像がはっきりし、コミュニケーション力や共感する思いにつながると感じた。

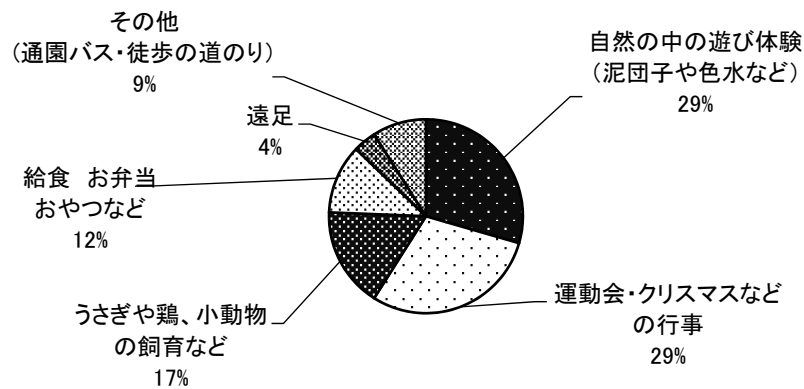


図1 【保育所・幼稚園の思い出】

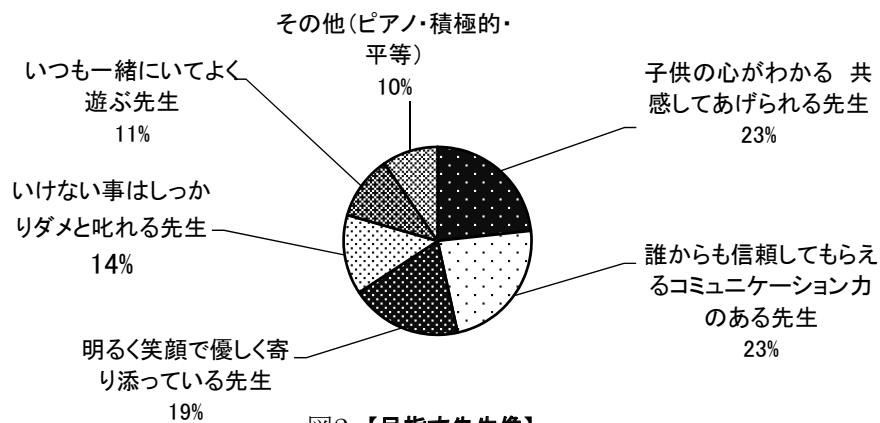


図2 【目指す先生像】

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- ・人見知りがひどくて、送迎のバスにも乗れないし、クラスにもなじめなかったから、担任の先生がずっと相手してくれたり、友だちになってくれる子ができて、なじめるようになったことを思い出した。そこから、その時の担任の先生のように、子どもが何を思っているのかを理解してあげられて、こうしてほしいと子どもが思ったことをしてあげられる先生になりたい。
- ・親が仕事で忙しくて、園の迎えが遅かったとき年下の子たちと虫取りや鬼ごっこをした。朝誰よりも早くて、帰り誰よりも遅いのが嫌だったけど、先生が私と一緒にいてくれた。私は、幼稚園に通っていた頃、私を絶対一人にしなかった先生にあこがれて保育士を目指した。その先生のように一人でいる子に寄り添い、どんな子も笑わせてあげられるような先生になりたい。今日の話し合いで憧れの先生を思い出し、聞いてもらえてますます思いが強くなった。
- ・よもぎ染めや田んぼで遊んだり、川に入ったり色水をしたりして、自然の中でいっぱい遊んだこと、うさぎやハムスター、鶏を飼っていたことも楽しかった思い出である。先生は優しくったけどダメな事はしっかりダメだと叱ってくれた。子どもの心をわかってあげられ、保護者の方にも信頼してもらえる先生になりたい。

【考察】

入学後間がない学生たちは、保育内容「表現」の授業に対して「いったいどんな授業なのだろう」と疑問を持っている学生が多くいる。「音楽」や「造形」のように分かりやすい分野があり、それ以外に何をやるのだろうと言う疑問である。「表現」の中には、手遊びやパネルシアターなど、子どもが楽しめるように演じる事も入るが、まず授業開始にあたり、幼稚園教育要領及び保育所保育指針における領域「表現」について理解し、「子どもの表現とは何かを学ぶ」必要性がある。そこで今回のように思い出を話し合ったり(図 1)、そこから見えてきた教師像(図 2)から、「生活や遊びの中にあるものを表現として捉えること」「コミュニケーションとしての表現を考えること」「自然に目を向けることの大切さを伝えること」「子どもの遊びを豊かにするための環境を考えていくこと」「保育者自身が表現者であること」などを学生に伝えていくことが重要であると考えた。学生たちは小さかった頃を思い出し、印象に残ったことを話し合うことで領域「表現」と繋げて新たな発見をし、「表現」をどう捉えるか今後の授業の方向性を確認することができた。

(2) 実践事例 手遊びやわらべ歌など子どもに返って楽しもう。

覚えている手遊びやゲームはどんなもの？

授業の概要

前回の授業で取り組んだ「小さな頃の思い出」の中で多かった、自然の中での遊びをヒントに、子ども達に最も親しまれているダンゴ虫に関する活動を取り上げた。導入では絵本や紙芝居で生態等を確認し、学生が興味を深めた所から手遊びやダンス、集団遊びへと授業の中で活動を発展させていった。久しぶりに取り組む手遊びやわらべ歌に対して、最初は表現することに抵抗を感じ恥ずかしそうにしていた学生も、繰り返すうち笑顔も見られ声を出すようになり、一つの事を皆と一緒に楽しもうとする協調性も見られるようになった。表現力の向上につながると感じた。

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- ・手遊びや集団遊びをすることで、普段あまり話さない人たちとも話す事が出来、とてもよいコミュニケーションになった。こういった手遊びは自然と笑顔になり教室が明るくなったようだった。授業で学んだことを表現し、今後活かせると思った。
- ・わらべ歌とか集団ゲームを久しぶりにやって、最初は恥ずかしかったけど、みんなとやっていくうち汗をかくてすごく楽しかった。大きくなっても楽しいと感じられるこういう伝承遊びはすごなあと思えた。
- ・今日の授業はみんなで作る楽しさと、子どもにどう教えればいいのかなどよくわかり、すごくいい勉強になった。ただ絵本を読むのではなく、本を読んだときに子どもに問いかけたり、話し合ったりすることでもっと興味を持ってくれることがわかった。また、少しの時間でもクラスの人たちと距離が縮まった感じがして楽しかった。子どもたちに教えられる手遊びをもっといろいろ知りたいと思った。
- ・だんご虫をつかまえたり、紙芝居や絵本を読んで興味を持ってもらったりして、科学的や生物学的に色々な事を知ることができるんだと思った。また、身体全体をつかって表現したり、昔ながらのわらべ歌などは、子ども達同士、親同士も距離が近くなっていいなと思った。今からいろいろな事を知って実習に行った時など、子どもたちと遊んでみたいと思った。

- ・だんご虫の事をよく知れて、今まで気づいていなかった事を知り生き物の大切さを学んだ。子どもたちに聞かれたり、言えたりできるように日頃から道端の花や虫などに興味を持ち感性を磨いていきたい。
- ・皆がひとりひとりでする遊び歌から、ペアを作ってする遊び歌、全員でする遊びまで色々したが、はじめは少し気恥ずかしく大きなフリや、歌を大きく歌うことができなかった。しかし、いくつかの手遊びを繰り返すうちだんだん楽しい気分になっていくことがわかった。大人の私でこういう感情になるのであれば、子どもたちはもっと楽しんでもくれるのではないかと思った。紙芝居からミニ図鑑の流れはすごく感動した。お話の中でダンゴ虫に興味を持ち、ダンゴ虫の生態を知りたいと感じる子どもの気持ちがわかった。

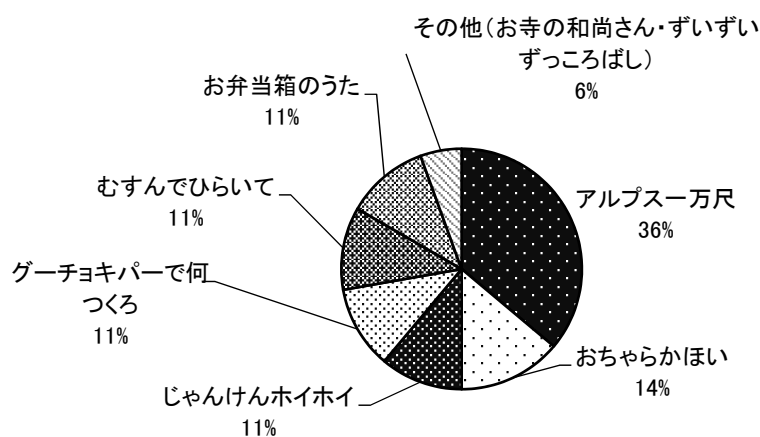


図3 【小さい頃によくした手遊び】

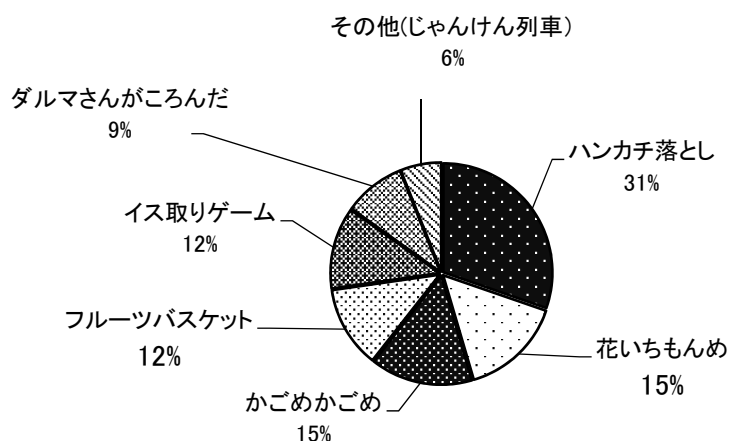


図4 【楽しかった集団ゲーム】

【考察】

幼稚園教育要領の領域「表現」で示された音楽に関する内容に「(1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」「(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。」「(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」とある。保育者は、子どもの表現の受け手であるとともに、表現者でなければならない。子どもの行為や言葉を表面的に捉えるのではなく、行為の背景にある心情などを読み取り、子どもを一人の意思を持った主体的な存在として受け止め、内面的な意味を捉えることが重要となる。自分の気持ちや考えを素直に表し、それを受け止められることを喜びと感じる体験を積み重ねることで、子どもは自分と言う存在に自信を持つことが出来る。その子らしさを大切にしようという保育者の大切な役割の意味を学生にもしっかり感じてほしい。また、内面的な意味を捉えるということは保育者にそれ相応の引き出しが必要となる。保育者は、暮らしの中で自分自身が感性豊かな日々を送ることが大切である。周りの様々な出来事に意識をもって生活し、子どもという存在の前で何ごとにも真摯に取り組まなくてはならないと考える。

今回の授業で、表現者として力をつけてほしいと、図(3)図(4)のように小さい時経験した手遊びや集団ゲームを思い出し、導入から徐々に発展させる活動の展開を子どもになって体験したことは学生に大きな感動を与えたようだ。授業の振り返りにも多く書かれていたが、授業の最初と後半ではその表情に大きな変容が見られた。改めて素朴な遊びの楽しさやその時の幸せな気持ちを思い起こし、表現者として子どもの前にたったときどうあるべきかなど捉えられた実践となった。

(3) 実践事例

身近にある廃材を使って自由な発想でかたつむりを作る。

個人の作品からアジサイの共同作品へつなげる。

授業の概要

身近にある廃材に目を向けて、最も作りやすくポピュラーなかたつむりをテーマにあげることで、学生の想像力や発想力を発揮させたいと考えた。また、製作で工夫した点や苦労した点を発表する機会を持つことで、他の学生の作品に目を向けて刺激を受け学んでほしいと願った。その後個人の作品を、アジサイという季節的なテーマを設け、共同作品にしていくことで技術力の向上と協働作業の楽しさを味わわせたいと取り組んだ。

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- ・かたつむりの製作は、生活の中で材料を探すのが楽しかった。身の回りに、ぐるぐるの物はないかなど・・・何か特徴を捉えて、廃材を探すワクワク感を感じた。色がないかたつむりでも、イメージをもってカラフルに変身させても面白く、1つ作り始めると、もう1つと言う様に欲が出て作りたくなった。
- ・一人ひとりの個性があり、素敵なアイデアがたくさんあった。材料もツナ缶や段ボール、包装のプチプチ、食べ物(ロールケーキ)などいくらでもアイデアが広がるんだなあと思った。色、形、それぞれの良いところを自分の引き出しに入れ、活かしていきたいなと思った。
- ・一人ひとり違う作品で、家族がいたり、アニメのキャラクターなっていたり、ストーリーがあるものがあって、どのかたつむりも幸せを感じた。
- ・かたつむりってどんなのかなと思い製作することで、かたつむりの事を以前より知って身近に感じて作ることができ

た。作っている途中で想像が膨らみ、次はこうしてみようとかイメージが広がって完成した時は達成感でうれしかった。また、他の人たちの作品を見ることで、自分にはない想像力を持っている人が多く、身近な廃材で工夫することによって個性的な作品となることに感動した。

- ・廃材を使うことが今まであまりなかったので、何が使用できるか考えるのが楽しかった。普段から使えそうな廃材を集めておくと、いざという時すぐ使えるので、これからは廃材集めもしていきたい。また、同じ材料を使っている人たちもいたけれど、全然違うように見えて個性があってよかった。
- ・アジサイの共同作品では、それぞれの個性を集めて、最後に大きなアジサイになった時ダイナミックな作品になって驚いた。1つだとさみしい感じだったが、合わさることたくさんのエネルギーを感じとることができた。
- ・一人でもくもく作るのも楽しかったけど、皆でワイワイする方が面白かった。色の付け方や色の選び方などそれぞれ違うし、色々なアイデアが見れて良かった。この気持ちを子どもたちにも味わってほしいと感じた。
- ・色々な色が混ざり合ってきれいなアジサイのようになって、園児もこういった作業をするのは楽しんでできるだろうと思った。自分の作品だけでなく、皆の作品が合わさることによって、すごく綺麗に美しい作品ができるのだと感動した。
- ・私は製作するのが苦手だったが、今回やってみてとても下手だが楽しくできた。自分がやりたいようにすることで、自分らしい作品ができるのだと思った。皆のアイデアをこれからも参考にしていきたい。

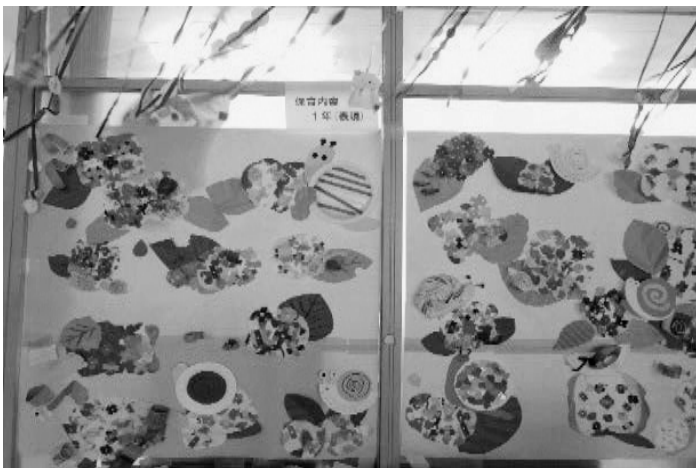


写真1〔学生共同作品 アジサイとカタツムリ〕



写真2〔学生作品 ロールケーキのカタツムリ〕

【考察】

学生の感想にもいくつかあったが、当初学生の中には造形的な表現に対して、「私は下手だから」「小学校の時から図工は苦手だった」「絵を上手く書けない」などの思いや見解が見られた。今後の表現の授業を総合的な分野から学ぶことを通して、彼女たちの苦手と捉えている制作に向かう「心情」「意欲」「態度」等がどのように変化していくのかそのプロセスも大切にしたいと考えた。

今回は身の回りの廃品を使い、自由にカタツムリを制作することで様々な作品が出来上がり、完成した作品を前に発表している学生の顔は、少しはにかみながらも誇らしげで生き生きとしていた。

幼少期に工夫してあそび、遊びの中から覚えた成功体験は、大人になっても忘れることがなく、知恵の積み重ねが人生の道を作るといっても過言でないだろう。初めての体験の積み重ねから、子どもたちは一つひとつその素材の意味

を獲得していく。生活の大半を園で過ごす子どもたちに、遊びを通して様々な素材に触れその存在に気づき理解する環境を、それに関わる大人たち、保育者が整えていかなければならない。今回学生たちは、「友人の作品に刺激された」「今後他の人たちの創造的な作品を参考にしたい。」「共同制作することでたくさんのことを学んだ」など、友人やクラスメイトに刺激された感想が多く、次回の制作に向かう前向きな姿勢となった。

(4) 実践事例 身近な子どもたちをよく観察し、どんな時にどんな行為で自分を表現しているか、その行為からその子の思いを汲み取って話し合う。

授業の概要

子どもたちの様々な行為や表現に対して、学生たちは関連した授業から成長段階や発達の経緯など多面的に学んでいるところである。今まで何気なく見ていた幼児期の子どもたちの表現に対して、子どもたちはどんな思いがあったのか、何を伝えたかったのか等、チャイルドウォッチングしてその子の思いを汲み取りグループで話し合うことで、傾聴力や幼児理解を深めたいと願った。

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- ・あるボランティアに参加し子ども抽選会を担当した時、2〜3 歳ぐらいの男の子が、お姉ちゃんがお菓子で自分はハンカチを当ててしまった。ハンカチの方が大当たりなのに、お姉ちゃんと一緒のお菓子がほしくて大泣きをしていた。この子にとってハンカチよりお菓子の方が魅力的だったんだと思った。5〜6 歳くらいになると、まだ人見知りの子もいて、小さな声で「ありがとう」とか言っていた。小学校低学年になると、自分から「ありがとう」が言えるし、景品の種類や玉の色をすごく気にしておしゃべりをしてくる。高学年になると、いさぎよくて、景品が気になるが、気に入らなくてもお礼を言っていさぎよく去っていく。そんなバイトの経験を活かして年齢別の反応の違いを話し合うことができてよかった。周りの人たちも興味を持って聞いてくれていたので、ボランティアの経験を話しやすかった。
- ・お店の中での子どもの様子、「自分から買い物カゴを持ったり、お金をレジの人に直接渡しに行ったりしている。」→自分でもできるんだと親や周りのおとなにアピールしている。好奇心が旺盛で、興味があることや挑戦したいことに自分からどんどん進んでいく。「なかなか母親と離れられずに、他のところにいけずに母親の後ろばかりについている。」→慣れるまでに時間がかかるようで周りの人たちから急かされると余計に焦ってしまうように感じた。興味を持ってそうなることから母親と一緒にやることで、自分からもやってみようとするのではないかと。「駄々をこねている。」→おもちゃがほしくてすごい自己主張をしている。きっと以前はすんなりかってもらった記憶があるのだろう。ダメと言われたことで、ますますエスカレートして駄々をこねていた。本人は何故買ってもらえないかわからないのだろう。このような事例をグループ人たちに話したら、みんな「あるある」と肯いてくれ、今まで気にも留めなかった場面を子どもの気持ちになって思いを話し合うことができて良かった。
- ・2 歳 8 ヶ月の妹、その場の雰囲気や言葉の出し方が違う。他の人の前で恥ずかしい時には小さな声でボソボソと話す。友だちと喧嘩等したときには自己主張するため大きな声で叫ぶ。自信のある事を話すときははっきりした声を出す。自分よりも小さい物、可愛い物に対しては優しく甘い声をかける。楽しい時、うれしい時は声も高くリズム感よく声を出す。声の出し方で気持ちを表現して訴えていた。普段妹のそんな姿を当たり前のように聞き流していたが、グループの人たちと話すことで再確認できた。

【考察】

領域「表現」において子どもを育むために、保育者がもっとも果たさなければならない大切な基本、子どもの「気持ち」や、取り組む「過程」の尊重は、言葉にならない子どもの「声」を大切に聴きとり、その「声」の実現を子ども自ら為すためのサポートである。

「表現したいという気持ちと、それを表現するまでの過程を大切にすること」と「他の幼児の表現に触れ、幼児間で創造する刺激を受け合う」という「気持ち」や「過程」を大切にするために保育者が果たさなければならない役割を、学生たちに伝えていかなければならない。

今回は、チャイルドウォッチングをすることで、子どもの姿や行為を身近に感じ、乳児から幼児まで発達を理解し、子ども全身から発せられる表現を受け止められるように、気付きを記録し話し合ってもらった。学生の多くがバイト先やボランティア、買い物の中で体験したことを報告しあっていた。中には自分の幼い妹から発せられる「言葉」をじっくり観察してきたり、タブレットやスマートフォンなど現代社会が抱える問題と照らし合わせながら子どもの姿を報告する学生もいた。感想の中に「何気なく見ていた子どもたちの行為や行動を、表現と意識して捉えることで、その子の思いに寄り添えるように感じた」等が多く書かれていた。

このように、子どもたちへの眼差しが自然と目の中に意識せずとも入ってくるような環境をつくることで、学生たちは、子どもの全身から発せられる表現を受け止め、学生自身が五感を研ぎ澄まし、身の回りの様々な出来事を敏感に感じ取れる豊かな感性への獲得につながっていくのではないかと感じた。

(5) 実践事例

グループで簡単な歌に合わせてリズム表現を創作する。

身体全体を使って表現することを楽しむ。

授業の概要

子ども達の日常の様々な行為から、内面的な表現を探り話し合ってきた学生達に、今回の授業では①身体全体を使って、様々な可能性を探りながら表現することを楽しむ。②音楽に合わせイメージを広げながら動きを工夫する。③一人ひとりがアイディアを出し合い、個の違いを生かし合いながら協力して進める。等、表現の深まりを捉える視点として以上の3つのねらいを設定しリズム表現に取り組んだ。方法としては、チームごとに創作した動きを発表してもらい、各々が点数を付ける事で、自分達のグループや他の人たちの動きをよく見て比較し、幅広い捉え方をしてほしいと願った。点数を付ける観点としては●歌の内容と表現(創作)が一致しイメージ豊かに表現されていたか。●リズム感よく楽しい動きであったか。●覚えやすく親しみがもてたか。である。題材として「おつかいありさん」の2番までとした。

授業の振り返り（学生による記述抜粋）

- ・歌詞に合わせて自分達で振り付けして、とても楽しかったし自然と笑顔になれた。他のグループも個性があって見るのも楽しかった。歌を身体で表現することがこんなに楽しんだと久々に感じる事ができた。



写真3〔振り付けを考える学生たち〕

- ・次々にアイデアが出てきて、やってみると笑いが起きて、楽しんで踊りができた。子ども達と一緒にやると、もっと楽しんでできるだろうと思った。周りのグループのダンスは、色々なアイデアにあふれていて個性的で楽しかった。



写真 4 「音楽に合わせて振り付けを確かめる学生たち」

・グループのみんなが楽しくできた。私達はユニークな面ではどのグループにも負けてはいないと思ったが、全体的に見てもレベルが高い創作だった。このように協力して全員で協働していくことはすごく大切なことだと改めて思った。特に子どもたちにとっても必要なことだろうと感じた。

・創作中、とても楽しくて笑いが止まらなかった。全員で話していると、自分では絶対思い浮かばない表現が出てきて新鮮で楽しかった。他のグループを見ていると、歌詞から連想するものは同じだったり、ひと工夫されていたりしてすごいなと思った。

た。短時間で考えて形にすることも学べたのでためになった。

- ・音楽的なことは苦手意識があって、一から考えるのは難しかった。でも皆のアイデアが素晴らしく、グループのみんながすぐに色々な案を出してくれてやりやすかった。自分の考えもつかないようなアイデアばかりで感動した。全身の動きだけでなく、手や足を使つての表現等ちょっとした工夫がすごいと感じた。
- ・私達のグループは「楽しく、簡単に、覚えやすい」をねらいにして振り付けを考えた。身近な歌でも簡単な表現を加えるだけで華やかになると思った。また、年齢に合わせて、動きを簡単にしたり細かくしたりもできるので是非やってみたいと思った。

【考察】

榎沢氏は、「子どもたちは日々、さまざまな表現をしながら発達している。自分を取り囲む環境から多様なものを内側に取り込み、表現として外に出す繰り返しは、生きていくための呼吸のように、発達に不可欠なものといえる。」「保育者に必要なのは、表現の過程に着目して、どのように、そして何を契機として発達するのかを理解することである。」としている。更に音楽的表現の芽生えとして、「音にかかわる表現は、言葉や身体による表現と密接に結びつきながら、音楽が生まれるような生活の中で発達する。」としている。「うたうこと」はまねることからはじまり、まねる対象の存在が大きな役割を果たすことになる。

今回の実践では、まねる対象である保育者として豊かな表現力を身につけるために、学生たちにリズム表現「おつかいありさん」を各グループで創作してもらった。

グループの発表は、どのグループも個性あふれる、創造性豊かな楽しい発表であった。授業内では短い時間だったため、授業外でも練習し、試行錯誤して発表に臨んだグループもあった。自己採点シートからは、創作をする上での技術的な振り返りや、実際に発表することや、他のグループの発表を見て学んだことなどの記述が多く見られた。又、何よりもグループ活動を通して、協力したことへの喜び、自分の意見を伝えることの大事さなど、協調性や社会性、コミュニケーション力の学びを感じた記述も見られた。

さらに、経験不足や恥ずかしさから人前で演じることに苦手意識を持っていた学生も、実際に演じて発表してみて、楽しさを感じたり、知らなかった自分を発見して自信をつけたり、またお客さん(他の学生)の反応に喜びを感じる記述も多く、以前にはなかったこれらの振り返りからは、彼女たちの新たな表現力が拡張してきたと言える。

- (6) 実践事例 生活習慣・行事・遊び等子ども達の身近なものを題材にお話を創作する。子どもたちにより分かりやすく伝える言葉を考える。

授業の概要

前回の授業は身体を使った創作表現を通して、表現の深まりを捉えてきた。今回は、幼稚園教育要領領域「表現」のねらいの一つである「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」について、言語的な面から迫ってみた。言葉の表現が未発達段階である子どもにとって、その気持ちを表現する手段として、心の中の感情や思考などを様々な表情や身振り、行動で発信している。保育者は受け手としてそうした表現を受け止めると共に、その気持ちを表現する手段をも伝えていかねばならない。そのためにも、学生たちには表現する技術を少しでも向上するために努力してほしいと思う。今回は、子どもをとりまく身近なものに目をやり、お話をつくりそれを子どもに伝えるという設定で取り組んだ。

授業における学生の提出作品（抜粋）

おはなし① 「かみなりくんとつばめちゃん」

テーマ 「友だちとの楽しい時間と別れ 季節の花」

・ある年の6月のこと、かみなりくんが雲の上で遊んでいると1羽のつばめが迷い込んできました。つばめは、まだ子どもで空を飛ぶ練習をしていた時、勢いよく飛んで雲の上まできてしまったのです。かみなりくんはビックリしましたが、つばめが「わたしはつばめ、つばめちゃんって呼んでね。」と言うと、かみなりくんは「ぼくはかみなり、かみなり君って呼んでね」と言ってすぐに仲良くなりました。その日から毎日毎日、つばめちゃんは、かみなり君の所へやってきて1日中遊んでいきました。かみなりくんにとってつばめちゃんは初めての友だちで、かみなりくんは毎日つばめちゃんがやってくるのが楽しみでしかたありませんでした。

ある日つばめちゃんはかなしい顔をしてやってきました。「今度の日曜日遠くの国に行かないといけないうだ!」と言いました。かみなり君はびっくりしたのと悲しい気持ちで、初めて2人は喧嘩をしてしまいました。その次の日からつばめちゃんは来なくなってしまいました。つばめちゃんが来なくなってから空の下では毎日大雨でした。「明日にはもう遠くへ行ってしまうのか・・・」とかみなり君がつぶやくと、勢いよくつばめちゃんが飛んできて「かみなり君、この間にごめんね。明日から遠くへ行っちゃうけど、私のこと忘れないで!」と言い朝顔の種を渡しました。「これは朝顔の花の種、5月に種をまいて育てると7月にきれいな花が咲くの。種をまいたらお水を忘れないでね。」とつばめちゃんはかみなり君に言いました。「ありがとう、大切にするとかみなり君が言い2人は笑顔で分かれしました。

次の5月、かみなりくんは種をまきました。蒔いたすぐは少しずつ水をあげましたが、葉っぱが大きくなってきた6月には朝と夕にはたっぷり水をあげ7月にはきれいな朝顔の花を咲かせました。かみなり君は朝顔の花が咲くたびに、つばめちゃんとの楽しい時間を思い出すのでした。6月に雨が多いのはかみなり君が朝顔に水をたくさんあげているからかもしれません。

おはなし② 「とわ君とひなちゃんのはみがき」

テーマ 「歯について、歯を磨かない子や、磨くのを嫌がる子に、歯みがきの大切さを知ってもらい、自分から歯を磨くようになることがねらい」

・あるところにひなちゃんととわ君がいました。とわ君は飴が大好き、毎日飴を食べています。今日は2つ飴を持っていたのでひなちゃんに1つプレゼントしました。するとひなちゃんは「とわ君ありがとう。でもいらない」と言って飴ちゃんをかえしました。とわ君はびっくり!こんなに甘くておいしいものを返すなんて。そう思っていたとわ君にひなちゃんが「とわ君、お菓子を食べたらね、歯にばい菌さんがやってくるの。そのばい菌さんは歯が好きだからくっついちゃうの。そうしたらね、歯みがきしても、歯の後ろにかくれんぼしたりして取れないの。だから、ちゃんと歯みがきしてね。」と言いました。とわ君は昨日の夜歯みがきをしなかったのを思い出しました。するととわ君は走っておうちに帰ってすぐ歯みがきをしました。そんなとわ君を見てひなちゃんにはっこり。その日からとわ君は毎日自分から歯を磨くようになりました。

おしまい



写真5 「夢中になって創作する学生」

おはなし③ 「ぼうしさまとおんなのこ」

テーマ 「外に行く時は必ず帽子をかぶりましょう。」

・昔々ぼうし様がおりました。ぼうし様が大人になるには、自分をかぶってくれる人間が必要でした。そこでぼうし様は自分をかぶってくれる人間を探しに出かけました。ぼうし様は初めて人間がたくさんいる世界にやってきました。ぼうし様は、自分をかぶってくれる人間に出会うため、ぼうしがたくさんあるお店に行きました。

最初にかぶってくれたお婆さんは、頭が大きすぎてぼうしさまが頭にはいりませんでした。次にかぶってくれたお婆さんは、頭が小さすぎてぶかぶかで、ぼうし様が落っこちてしまいました。その次にかぶってくれたお姉さんは、とても強い香りがしてぼうしさまの鼻がちぎれてしまいそうになったので、かぶられるのをあきらめました。

あきらめかけた時、小学生くらいのおんなのこが、ぼうし様を手にとってかぶりしました。すると、ぼうしさまと女の子の頭の大きさがぴったり合い、ぼうし様をかぶった女の子はとてもかわいくなりました。そして、ぼうし様もニコニコ笑顔になりました。ぼうし様は、女の子と一緒に家に行くことになりました。その後、ぼうし様は女の子といつも仲良く一緒にお出かけするようになりましたとき。

おしまい

【考察】

子どもたちは、日常生活のなかで自然や社会の事象や現象と出会い、それらのもつ美しさや大きさ、不思議さやおもしろさなどに気づいている。そうしたさまざまな気づきが、子どものなかにイメージとなって膨らみ、言葉や身体の動き、素材となるものなどを仲立ちにして、自分なりの方法であらわしていく。

子どもがいきいきとイメージを広げたり、膨らませたりしていくには、保育者が、子ども自身のいろいろと感じている心の動きを受け止め、理解することが必要である。十分に自分の感情を表現できる自由な雰囲気があり、子どもらしいものの考え方やとらえ方が認められると、自信が生まれ、自己肯定感が育っていくだろう。

榎沢氏は「子ども一人ひとりの具体的なイメージは、それぞれの心のなかに豊かに蓄積され、それらが組み合わせ、いろいろなものを思い浮かべる想像力となって、新しいものを作り出す力へと繋がり、意欲的に表現する力が育っていく」としている。

今回の実践で学生たちは、頭を抱えながらも想像力を働かせ身近な生活をテーマに創作をやり遂げた。学生が創作したお話を読み上げると「ほー」「へーすごい」という感嘆の声や「こんな事もお話になるのか」「子どもにわかりやすい」など、「表現」を幅広く捉えていく様子が伺えた。

前文の目的に、学生たちにまず学んでほしいのは、表現の技法のみではなく、表現を引き出し、尊重し、共感し、その楽しさを共有できる心と身体である。子どもたちの表現の誕生に立ち会い、育む人になるために、まず心を開き、表現を楽しむ人になってほしいと掲げたが、動的な活動に対して苦手意識のあった学生が夢中になって創作するなど、新しい自分の表現力を発見した学生がいたことは、授業の目的がある程度は達成されたのではないと思う。

- (7) 実践事例

共同作品 夏の壁面制作をする。個々のオリジナル作品を大切に発想力を活かした共同作品となるように題材を自由に考える。

授業の概要

園内の環境を豊かにするためにどの園でも季節の壁面を掲示している。学生たちも現場に出たらクラスの掲示物として制作する必要があるだろう。ここでは、造形表現の領域として、①造形性、②配置と大きさ、③構成あそびという3つの学びのポイントを挙げ、夏というテーマのもと単に組み合わせて構成するのではなく、一つ一つの作品の価値を確かめ合い、複数のプランから最良の表現を皆で生み出すのが理想であると考え取り組んだ。学生たちが話し合い、協議を経て考えや思いを形と色に変えることができるならば、創造性豊かな感性を養う一助となるはずである。

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- 共同制作をしてみて、小さい頃はただ作ることが楽しいと言う感覚だったが、今やってみると、作る楽しさは勿論だが、皆でひとつの作品を作る事で楽しさが増えた気がした。1つや2つしか自分は作ってなくても、完成品を見たとき大きさやすごさに「これ、自分も作ったんだ」と自慢げに思った。子どもたちは私の感じたように協働作業によって「一緒」に作るという楽しさや面白さ、1つのものに対して数人で取り組むと言う「協調性やチームとしておこなう力」など、周りと合わせる楽しさや大切さを学んでいくだろうと思った。



写真6〔海の生き物と不思議な世界〕

- ・誰が何をするかを話し合い、皆で海のテーマで壁面を作れたのが楽しかったし、1つのことをみんなで協力することで頑張ろうと思えた。それぞれのグループが出来上がっていくのを見て嬉しい気持ちになって、完成したときは達成感を感じることができた。子どもたちに協働作業を経験させる時に、一人ぼっちで作るのではなく、友だちと一緒に作れるように「これ何かな、皆で考えてみようか」等と声をかけたり、誰かと考えられる環境を作ることが大事だと思った。そして保育者が多くを用意しすぎず、子どもたちが自由に好きなものを作れる環境を準備することが大切だと思った。
- ・共同制作をしてみて、どれも1つ1つの作品に個性が色々あり、やっていて「こういう作り方もあるんだ」とたくさん他者から学ぶことができた。完成したときは、皆の作品を1つにまとめることでさらに迫力が出て、色々な個性がにじみ出ているいいなと思った。友達との共同作業をすることで、子どもたちは社会に出て仕事をする時にも通用する、協調性、共感性、競争心、そして勤勉さを身につけることが出来るのではないと思う。私が保育者になり共同制作をする時は、前もってたくさんの材料を集めておき、テーマを決めて子どもたちに自由に作らせるのもいいなと思った。
- ・自分1人だと固定観念にとらわれてしまうが、今回他の人と組み合わせることで色々な作り方があるのだなとすごく学べた作品作りだった。一緒に作ると、個人の苦手な分野、得意な分野を見つけ高めて行ける、保育者同士が高め合える機会になるなと思った。又、作るときだけではなく、壁面に貼っていく作業も子どもの思いを育てることができる大切な時間であることが分かった。



・それぞれがイメージしたものを1つの絵の上で表す事で、カラフルな壁面ができてとても感動した。子どもたちも日々の中で様々な体験をすることによって、感じた気持ちを友だちと共有したり個性を知れたりして、自分の作品に自信を持てたりすると思う。又、友だちの作品を見ることで「次私もやってみよう」と言う新しい意欲に繋がると思った。

写真7〔テーマに沿った学生たちの作品竜宮城〕

【考察】

造形的な表現は、素材を扱うといった点や、作品という結果を「形」として捉えることができるといった点が、言葉や身体を使つての表現とは異なる。又、イメージしたことをあらわすのに「技術」も必要となる。物を扱っているので、保育者は子どもの表現に気づきやすいが、作品という結果のみを評価するのではなく、製作過程における子どもの思いや取り組みをきちんと捉えていくことが重要となる。又、自分の表現が「作品」として残るということは、子どもが自分の行なったことを目で見えてわかり、満足感・充足感を味わうことができるという良さがある。そのほか、子ども同士が分かり合うことや、共同作業を行なうきっかけにもなる。

学生が造形活動に向かうとき、作品や仕上がりの出来栄を最優先に考え授業に取り組む姿がしばしば見受けられる。又、就学後の図画工作や美術教科には得手、不得手に加え、高等学校時に選択科目として履修した者とそうでない者との分かれる現状にある。学生に個人差が見られる現状の中で造形表現の知識及び技能を修得するための質的保証を考えた時、学生たちに内発的行動を誘発するような授業展開が必要であると考えられる。

今回の実践は、現場に出たら誰もが経験する壁面制作であるが、何のために必要なのか考えさせる機会にもなればと願った。話し合いに時間をかけて、学生一人一人が主体的にかかわれるように、余裕をもって作業に取り掛かることで、協働することの大切さを改めて感じさせたおおきな共同作品になった。また、自身の制作を通して子どもに造形指導や援助する場面を想像しながら、子どもへの対応や支援や援助の方法を学生自ら思考し、振り返りに記述していたことは、学生にとって保育者としての意識を高める動機に結びつく結果になった。

(8) 実践事例

音楽に合わせてオペレッタを表現する。

劇を作る過程を経験し、表現力の向上を目指す

授業の概要

今までの授業の集大成として、グループでオペレッタの動きを創作し発表する取り組みを通して、コミュニケーション力、想像力、発想力、共感、傾聴力、判断力、協調性、行動力など「表現力」に必要な力の向上を目指した。題材は学生たちもよく知っている「かさじぞう」にし、結末や登場人物などを変えてもいいので、自由にのびのびと自分たちのオリジナル性を加えることとした。又、自らが体験し、他のグループを鑑賞することによって、鑑賞の能力、身体表現の技術、劇発表の技術を学ぶことも目的とした。技術的な向上はもちろんだが、オペレッタや劇遊びをしたことがない学生も多くいるので、音楽に合わせて創作していく過程をまずは経験し、学生自身が楽しんで、表現の幅、技術、面白さを広げてほしいとねらった。

授業の振り返り (学生による記述抜粋)

- ・身体を動かそうと意識して動かすのではなく、表現したいという気持ちやリズムにのって自然と身体を動かせるところがいいなと思った。そして自然に笑顔になれた。手を大きく上げたり、しゃがんだり、ステージでは大きな動作が多いと感じ、ハキハキと動かす事も大切だと思った。短い時間に仕上げたものであったが、役割分担して全員で作り上げたことで達成感も味わえた。表現して、それを見てもらったり、認めてもらえる楽しさ、嬉しさを知ることができた。
- ・役になりきり表現することで、とても楽しく演じることができた。皆が楽しんでいたこともあり、ずっと練習中も笑顔でいることが多かった。皆がひとつになり作品を作り上げることで、ペープサートやパネルシアター、絵本を読む時とは違う楽しさを感じた。子どもに演じさせる場合、導入が大切だとわかった。その役のことを知っていても、再度演じる物語の本を読み、子どもの中のイメージをしっかりとすることで自分なりに表現し、オペレッタの中で楽しめるのではないかと思った。
- ・身体をいっぱい表現するのはとても楽しかった。子ども達の中には表現が上手でのびのびできる子もいれば、恥ずかしくてなかなか出来ない子もいると思う。私はその子達の手助けをするのも大切なので、その子達の中で高めあえるようにしていきたいと思う。子ども達に演じさせる場合、一人ひとりが楽しく、のびのび、思い切って表現することだと思う。
- ・劇は保育園の時以来で、私は踊ることが得意ではなく、どちらかと言うと下手だし、恥ずかしいと思っていた。しかし、周りの皆が精一杯に元気に楽しそうに演じているところを見て、私もやる気が出てきた。子どもたちと劇遊びをするときにはすぐに役も決まらないと思うので、それぞれが交代したり、順番にやったりして子ども達みんなが楽しめる環境や精一杯なりきって演じることで、1つのことを皆でやりきった達成感が味わえると思った。また、クラスの友だちとの良い関係が日々の生活やイベントに影響してくると思うので保育者になったら日常のやり取りを大事にしたいと思う。

【考察】

子どもの頃に物語の主人公になって遊んだ経験は誰にでもある。あこがれをもち、そのものになりきって動くことを楽しんだことだろう。子どもは自分以外の人物や動物、架空の生き物などになり想像の世界を楽しむ。それは、ただ役になっているというだけではなく、友だちとの共通のイメージのなかで、ストーリーやエピソードなどをもった形で表現である。子どもがなる役は、母親や先生といった身近な人から、動物、怪獣、正義の味方、アニメのキャラクターなどさまざまである。衣装や装飾品、持ち物などいろいろなものをつくって身につけたり、場を構成したりすることでイメージをより高めていく。

また、ストーリーを子どもが創作していく劇遊びや、役そのものから子どもが創作する劇遊びもある。子どもがなりきって遊ぶ表現にストーリーを加え、話の筋を共通に理解して進めていく事も大切である。劇遊びでは、保育者が子どもの発想をつなげていく役割を担うが、形にまとめることを急がずに、子どもの表現したいという意欲を高めながら演じることの楽しさを実感していけるようにしなければならない。そういった事を踏まえて、発表会では子どもの表現をなるべく多く取り上げていくことが大原則である。できばえを重視して、子どもが与えられたものをこなすだけでは意味がない。子どもの表現は内なるもののあらわれであり、発表会もまた子どもが表したいものが十分に発揮できるようなものでなければならない。

今回の実践では創作オペレッタを経験し、「歌とダンス」「ストーリー」「表現」等がどのように伝わるか取り組んでもらった。学生自身による振り付けについては、いままでの授業での取り組みを生かし、動きが揃っていたり、動きが大きく伸びやかさがあつたりと、学生の振り返りの記述の中にも賞賛する意見が書き込まれていた。また、発表会を通して相互の演技を鑑賞することが、自分自身やグループの取り組みを振り返る好機になったことが多くの記述から認められた。発表会という経験をすることで、発表における子どものわくわく感であったり、不安感等体験することで、現場で出会った子どもたちにどのような言葉掛けや援助ができるか、学生の学びに繋がる授業となった。

5. 【まとめ】

本研究の目的は、授業を通して学生たちの「表現力」と「実践力」の向上につながる授業の視点を検討し、1年生から2年生への表現・造形表現活動に対する変容や指導法に関する実践的研究をまとめ、今後の授業内容の改善に役立てることであった。そのため、どのような授業を展開していくことが学生の理解を深め、より深い学びとして身につけていくのかを15回の授業実践を通して、学生の振り返りの記録からその効果を検討した。

近年、学生の中には身近な自然に気づいたり、いろいろなことに関心を持つ好奇心や感性の低下が感じられる。人と関わること、コミュニケーションや思いを表すことを苦手と自覚する学生も増えている。いずれ保育者となって子どもの表現力を育てていく立場になることを踏まえると不安な事である。保育者を目指す学生が五感を磨き、周りに目を向けて関わりを持ち、やり取りを楽しめるようになるために、保育内容「表現」の15回の授業では、身体を媒体とした「身体表現」、音や声は「音楽表現」、言葉は「言語表現」、ものや絵による表現は「造形表現」など、これらの表現の源が密度につながって結びついていることを確認し合いながら進めてきた。

生きることはさまざまな形で自分を表現することである。授業の中で学生自身が子どもに戻ってさまざまな表現を体験することで、遊びや生活の中に子どものさまざまな表現が表れていることを明らかにしてきた。また、遊びや生活の中に芽生えている子どもの表現を出発点として、表現する力を育むために、どのように子どもの活動を援助すればよいのかを具体的に理解できるように、様々な授業内容や授業形態を通して取り組んできた。

授業の回数を追うごとに、学生たちの表情が柔らかくなり、入学当初の気負いや苦手意識が克服されて、幅広く表現

力を身につけようと前向きに取り組んでくれた学生の姿や、授業を通しての豊かな人間関係の構築は、筆者にとって研究の励みになった。

変化の激しいこれからの時代を生き抜く子どもを育成していくためには、保育教諭の養成においても、「乳幼児」を中心に置きながら、幅広く、より深い内容の知識・技能の習得が今後も求められるであろう。保育内容「表現」で学んだ内容をどのように「造形表現」等の授業科目と連携させていくか、またどのように実践に生かせるか等今後の課題とし、地域の幼児教育に貢献できる力量を備えた質の高い保育者養成を目指していきたい。

子ども学科 准教授

藤井美津子

【引用文献・参考文献】

- 1) 新幼稚園教育要領解説 文部科学省
- 2) 新保育所保育指針解説 厚生労働省
- 3) 榎沢良彦「保育内容・表現」
- 4) 中川晶子 小島千恵子(2018)「保育内容表現」に関する学びの意義 名古屋短期大学研究紀要
- 5) 小波津奈美子 保育内容(表現)の指導法 沖縄女子短期大学紀要 第31号
- 6) 熊田桂子 子どもの表現力を育てる保育者の表現力の源を探る試み いわき短期大学研究紀要 Vol.51
- 7) 土井晶子 保育者養成校における「園環境が育む子どもの感性と表現」の授業プログラムの検討 共栄大学研究論集 第16号
- 8) 富金原光秀 保育内容「表現」指導法における評価に関する研究 豊岡短期大学論集第14号
- 9) 加藤明代 保育者養成校における表現指導の取り組み 常葉大学短期大学部紀要 48号